バルザック『アネットと罪人』とノディエ『ジャン・スボガール』、あるいは二つの悪夢

私市保彦

はじめに　『人間喜劇』以前のバルザックの小説『アネットと罪人』は、ウオルター・スコットの『海賊』やマチュリンの『放浪者メルモス』などからの影響が指摘されているが、とりわけノディエの『ジャン・スボガール』からの影響が、強調されている。ピエール・バルベリスのことばを借りると、「『アネット』の第一の種本（source）がノディエの『ジャン・スボガール』であることは明白だ」となる。[1]

しかし、じつは、ノディエの『ジャン・スボガール』そのものが、一八一八年に匿名で発表されて以来、シラーの『群盗』、バイロンの『海賊』、チョッケの『大盗賊アベリーノ』（Heinrich Daniel Zschokke : Abällino, der große Bandit［一七九三］であるが、フランスでは Lamartelière の翻案、Abellino, ou le grand bandit が一七九九年に上演されている）から剽窃したという非難にさらされた作品である。一八三二年に本名でもって改訂版を刊行したときにつけた「前書」では、バイロンやチョッケからの剽窃をきっぱり否定することに終始している。[2] しかし、こうした状況は何を物語るであろうか？　ノディエはシラーを剽窃し、バルザックは、ノディエを剽窃したというのだろう

か？

そうではなくて、十八世紀以来、美女の拐かしや美女との恋がからまる群小の海賊・盗賊小説が流行して、それぞれの作家がそのテーマで自分なりのヴァージョンを創作したというのが、正当であろう。また、そう考えてはじめて、バルザックが、そのような潮流のなかでどのようなヴァリエイションを編みだし、どのようなオリジナリティーを発揮しようとしたかが、わかるのではないか。

ここで、かつて、バルザックの初期作品の系列をまとめて読んでいたとき、とりわけ『アネットと罪人』に感動を受けたことを思い出す。それ以後、機会あるたびに初期小説の代表的な作品としてこの暗黒小説のコメントをしてきた[3]。しかし、バルザック自身は、生活のために筆名を使って創作したこの種の大衆小説を（バルザックはこの時期、Horace de Saint-Aubin の筆名で、*Vicaire des Ardennes*［一八二二］、*Le Centenaire*［一八二二］、*La Dernière Fée*［一八二三］、*Annette et le Criminel*［一八二四］などを発表している）、非嫡出子として『人間喜劇』にも入れようとしなかったバルザックのそのような態度もたいへんによく理解できる。少なくとも、『人間喜劇』に見られるような、心の暗部を切り裂く鋭いメス、天にまで光が放射するまばゆい輝き、哄笑をもたらす喜劇的な風刺、輝きのある豊饒な筆致を、この初期小説に期待しても無理であろう。しかし、若きバルザックがそのとき、全力投球をしたあとがあるのも事実である。そして、バルザックはそれをほめられたり酷評されたりした記憶をしかと頭にとどめていたはずである[4]。いわばバルザックは、若き日の瑕瑾ある荒い原石を珠のように磨いて、つまりそれをバネにして作家として成長したわけである。そしてわれわれバルザックの愛読者と研究者は、後年珠のように磨かれるこうした原石を見つけることに、どれほど惹きつけられることであろうか。少なくとも、『アネットと罪人』には原石の秘められた輝きがあることは確かである。

そこで、本論では、〈仮面〉、〈予知夢〉、〈夢想と行動と〉、という三点にしぼって、『ジャン・スボガール』と『アネットと罪人』を比較しすることで、バルザックにオリジナリティーがあるのかどうかを検討してみたい。なお、以上の三点はからみあっているので、必ずしもそれらを分離して論じているわけではないと、あらかじめ断っておく。

＊　＊　＊

仮面　『アネットと罪人』の冒頭は、アネットの父親のセヴィニェ氏が、役所をお払い箱になったところから始まる。セヴィニェ夫人はそれを機に、ヴァランスで商家を営んでいる姉妹の娘の結婚式にでるために、夫に留守をたのみ、娘のアネットと、セヴィニェ家に寄食して法律を学んでいた甥のシャルルとともに、ヴァランスまで馬車で旅をすることになる。その途中、鋭い目の屈強な男が仲間とともに馬車に乗りこんでくる。自分らの馬車が崖に転げ落ちたてこわれたためである。ところが、そのあと一行は盗賊団におそわれる。すると、屈強な男は盗賊団を一喝して、盗賊を追い払ってしまう。ヴァランスにつくと、この男は県知事の友と名乗り、デュランタルの豪壮な城を買い取って、人々を驚かせる。しかも、姪の結婚式のときには、悪者にさらわれそうになったアネットを救いだし、自分の城にかくまう。

ここで、同じ作者による前作の『アルデンヌの助任司祭』（一八二二）[5]を読んでいる読者には、この男はじつはアルゴウという海賊であることが、すぐわかる。また、前作とのつながりについては作者による各所の附注があり、そもそも序文は『アルデンヌの助任司祭』が発禁処分になったことについての弁明で終始している[6]。アルゴウだけについて前作とのつながりを述べると、『アルデンヌの助任司祭』では、アルゴウは船長の船を略取したのち、銀行家のマクサンディー侯爵と名乗って、そのとき孤島に置き去りにしたジョゼフという若者（のちに助任司祭）と妹（のちに従妹だとわかる）が救助されてフランスに帰国するや、その身辺につきまとい、ジョゼフと相思相愛のメラニーに

横恋慕して、略取した船の元船長でジョゼフの叔父のサン＝タンドレ侯爵を殺し、ついに捕らえられるが、監視人ルセック（この人物は、『アネットと罪人』ではド・セックと改名し、デュランタルの村長として再登場している）を買収して逃亡することになっている。

そのマクサンディーこと元海賊アルゴウは、ここではデュランタル城を手に入れてデュランタル侯爵と名乗っているのだが、彼はアネットと会って以来彼女に夢中になり、アネットが母親とともにパリにもどることになると、馬車でパリまで追ってきて、アネットの家に出入りするようになる。すると信仰に篤いアネットは、アルゴウに神への絶対的な帰依をもとめるが、アルゴウにはそれができないので、ふたりのあいだに溝が生まれ、アネットは消耗してゆくというのが、物語のはじめの筋書である。

＊　＊　＊

ところでこの物語は、『アルデンヌの助任司祭』の最終頁での予告によると、ただの『罪人』と題されることになっていた。[7] 一方、スブラン書店が一八三二年に『オラース・ド・サン＝トーバン全集』に収めて再版したときに『海賊アルゴウ』[8]というタイトルに変えられると、そのタイトルで呼ばれることの方が多くなった。しかし、バルザックがあえて『アネットと罪人』としたのには意味があろう。つまり、この物語のテーマは、聖女のように信仰篤い女性と大罪人とのありえないような愛のドラマであるからだ。その深淵をどのように埋めて、ふたりは結ばれるのか結ばれないのか、結ばれるとしたらいかにそれをリアルに描くかというのが、作者の筆力ということになる。その第一の関門としてバルザックは、ふたりのこの超えがたい溝に、アネットが気づく場面を描いてみせる。

「あなたはキリスト教徒なのですか」とアネットが詰問すると、アルゴウは「わからない」と答える。「神さまの話をだれかから聞いたことはなかったのですか?……」とまた聞くと、「一度も……」と答える。彼女は腕をよじり、

涙が目からあふれ、叫ぶ。「ああ、あなたの天の慈愛がわたしに深淵を見せてくださいました。デュランタルさま（アネットは海賊アルゴウをデュランタルという富豪と思っている）、そとにでてください！」[9]と。このように超えがたい「深淵」をアネットに見せたあと、バルザックは、つぎの教会でのモンティヴェール神父の説教の場面をもってくる。[10]

ここには、ふたりの「深淵」を描いたあと、それを埋めるというバルザックの戦略がある。また、当時バルザックがあたためていたのについに公表する機会をもてずにお蔵入りになっていた「祈祷論」で訴えていた信仰者の問題を、ここに取り入れるようとしたことも考えられる。[11]したがって、モンティヴェール神父の説教は、アンバランスなほどながながと引用される。そのエッセンスは、悔い改めて、神をあがめよというものだが、それを聞いて、アルゴウは震えおののき、神父に罪を告白し、アネットから離れる決意をして、それをアネットに伝える。しかし、このように改悛することによって、アルゴウはアネットの宗教世界に受けいれられるようになるのである。[12]ただし、このあたりの二人の恋情を描写する筆致は、ほとんどありえない設定であるだけに、作者が力を入れれば入れるほど皮相的になり、どうしようもなく甘くなっている。しかし、いずれにしてもふたりは結婚して、デュランタルの城で暮らし、近隣の貧しい人々に慈善を施して、慕われるようになる。つまり、海賊アルゴウは、大富豪の慈善家デュランタル侯爵として世間から敬愛される人物としてふるまっているのである。

こうした犯罪者・反逆者の仮面のモチーフが増幅し、さらにヴィドックという実在人物の特徴が取り入れられて、ヴォートランが誕生することは、バルザッシアンが連想するところであるが（バルベリスは、ジャック・デュランタルという名が、ヴォートランの実名ジャック・コランのジャックにつながると指摘している）[13]、この変装のモチーフはノディエの作品ではどのようにあらわれているだろうか。

＊　＊　＊

ノディエの主人公はジャン・スボガールという天下に恐れられている盗賊の首領で、一方ヒロインは、トリエステのモンテレオネ城で、母親代わりになっている未亡人の姉アデライド夫人と二人暮らしをしている、アントニアという心身ともに繊細な娘である。ある日、森でまどろんでいるアントニアにスボガールが近づいて、一目惚れをして、「ここに、わたしの人生の定めとなったモンテレオネ城の娘がいる」[14]とつぶやいて消えたのち、ひそかにつきまとうということになる。こんな事件などがあってから、姉は妹をつれて城を離れ、貿易商であった亡父の残務を片づけるためヴェニスに赴く決意をして、馬車で旅立つ。ところが、一行は途中でジャン・スボガールの一味らしき盗賊団におそわれる。しかし、途中から馬車に乗りこんでいた若いアルメニアの修道僧がでてゆくと、たちまち盗賊団は退散してしまう。[15]

ヴェニスに着くと、ロタリオという人物の噂でもちきりであった。この男の出自は謎につつまれていたが、時々ヴェニスに滞在しては、慈善をほどこしたり、社交界に顔をだしたりして、みなから畏敬されていた。たまたま、アントニアと姉は、一年ほどの不在のあとにヴェニスにもどってきたロタリオと社交界で出会うことになる。アントニアはロタリオに惹かれ、相手もアントニアと近づきになることを求め、やがて二人の仲は公然たるものとなり、姉も結婚まで考えるようになる。

むろん、盗賊団を追いちらした修道僧も謎の慈善家ロタリオも、スボガールの仮面であることが、それとなく読者にほのめかされる。そして、修道僧が馬車の空席に乗りこんできて、盗賊を追いちらしてアントニアたちを助けるという一幕は、『アネットと罪人』で馬車に乗りこんできたアルゴウが盗賊を追い払う場面と酷似していて、バルザックがノディエを模倣したことはありありとしている。むろん、ロタリオになりすましたスボガールがアントニアに近

づく筋書も、バルザックは前作の『アルデンヌの助任司祭』とこの物語で借用しているようである。

しかし、仮面・変装のモチーフの扱いは、バルザックとノディエとのあいだでは決定的にちがう。アネットの方は、やがてデュランタルの正体がアルゴウとわかる瞬間が訪れるが、アントニアはロタリオとスボガールが同一人物であるという決定的な解答をえることなく、死んでゆくからである。

捕らえられた盗賊団にまぎれているスボガールを見ると、それが以前鏡に映った陰気な顔のロタリオ（後節参照）にそっくりなのに気づいて、「ロタリオ」と呼びかけても、自分はスボガールだといいはる。さらに、「ロタリオ！ロタリオ！」と叫んでも、彼は「ジャン・スボガール！」と「力をこめてくり返した」のである。[16]

こうして、ノディエでは、二人の人物は分裂したままであり、アントニアも二つの顔のあいだで引き裂かれ、ロタリオが告白した宗教的な虚無を救うこともできずに、死んでゆく。

そして読者にはさいごまで盗賊として活躍するスボガールの姿は見えないのに対して、モンテネグロの山地で自由を享受している人々のあいだで暮らした青春時代のロタリオの回想や、彼の残した「鋼の留め金のついたロシア革の覚書帳」[17]に書きつけられたアナーキズムに近い反体制的な随想だけが、後述するように作品のなかで大きな意味を持っている。

おそらく、盗賊スボガールよりもロタリオのほうがノディエの分身であり、ノディエが彼にみずからの夢想を注ぎこんでいるのは確かである。このような夢と現実に引き裂かれる自己分裂のテーマはノディエの主要なテーマであり、やがて狂人の夢想を語る『パンくずの妖精』（La Fée aux Miettes）などにひきつがれてゆく。

一方アネットは、デュランタルが仮面の裏にかかえているアルゴウとしての心の闇を、自分の心の闇としても共有してゆく。そして、彼がやがて殺人罪で投獄され、脱獄し、ついには処刑されるまで、すべての彼の運命を目撃し、

直視し、彼のあとを追って絶命する。こうして、純潔な「聖女」は大罪に苦しむ「罪人」とのあいだの深淵をこえて、彼に殉じてゆく。アントニアとくらべれば、変装する人物と運命が結び合うという表層的な相似があるといっても、これほどにちがうふたつの運命はない。

なお、悪人が善良な人物に化けるという仮面のモチーフは、なにもノディエの独占物ではなく、暗黒小説ではおさだまりの設定であることも思い出さなければならないだろう。少なくとも、バルザックは、さまざまな暗黒小説で同じ筋書を見いだしたはずである。

＊　＊　＊

予知夢　バルザックは、『アネットと罪人』を暗黒小説に仕立てるために、その種のジャンルに特有の、あるいは紋切り型ともいえる「予知夢」というたて糸で構成をつらぬく軸とした。そのため、フォントネルやギュイヨン夫人を信奉しているヒロインのアネットは信仰深い純粋な処女でありながら、「少しばかり迷信深く臆病になりがちである」[18]と彼女を指導しているモンティヴェール神父が心配しているさまを紹介して、はじめから伏線を張りめぐらせている。

そのアネットが、不吉な夢を見て震えあがるのは、従妹の結婚式のときに盗賊たちに拐かされたところアルゴウに救われて、デュランタル城にかくまわれたときである。城の一室で、アネットは不吉な夢を見る。

彼女は夢を見た、彼女はとても清らかで、純真であった。しかし彼女の夢のこの部分が悪夢となって、彼女に恐ろしい苦しみをあたえたのだ。夢では、いくつもの戦いを経たアルゴウが、われわれがこの物語の始めに描いたパリのあの寝室の彼女自身の無垢のベッドの、彼女のかたわらにいた。そこに、このたぐいまれな人物がやって来ると、彼女は数知れない心づかいと思いやり、そして専敬の念さえ彼からうけるのを感じたが、それは、彼女の夫の

外観から想像される性格や態度とは合わないものに思われた。夫とここでいうのは、確かに彼女は彼と結婚したことを思い出したからだ。しかし、夢のなかでは、アネットがふたりのあいだに作った障害をデュランタル氏が乗り越えたときに初めてこのことを思い出していた。

夢の常軌を逸した力に駆られて、この娘は自分自身の羞恥心とあらゆる思いこみに打ち勝った。しまいには、彼女を女神と見て、彼女をそのように遇するこの不思議な人物の驚くべき敬意を制しようと、アネットは彼と浮かれ、戯れた。彼女はふざけ、ふざけながらその巻き毛の大きな頭をかかえ、自分の純白の肩に押しつけて、彼の髪のなかに手を通した。彼女は清らかで子供っぽい愛撫で、彼を励ましているようだった。なぜであろうか？　彼女にはわからなかった。しかし、彼女をこの上なく満足させたのは、その両眼が輝いたかと思うと、伏せられ、それが交互に繰り返されるのを見ることであった。

そのときだった。その頭を胸に抱き寄せると、ナイフの刃のように細い、微かな赤い線がその首にあるのに気がついた。その線は血のように赤く、夫の首のちょうど真ん中を一周していた。その印を目にするや、冷汗が流れ、動けなくなってしまった。彫像のように、同じ姿勢のままだった。話そうとしたができなかった。ひどい恐怖が彼女を凍りつかせていた。彼女は夢のなかの気分のまま、震え、恐れおののき、はっと目覚めた。心臓はあまりにも強く鼓動を打ち、まるでとぎれとぎれの声のようだった。

アネットの考えでは、夢は、純粋な精霊の領界から発せられる警告である。それらの精霊は、肉体がもはや魂に作用しない瞬間をとらえて、漠とした未来を示すことで、天と地のあいだを飛びかってふたつの世界を仲介する精霊として、天を愛しているがゆえに目をかけるに値する人々を導くのである。[19]

おびえた彼女はこの悪夢を忘れようとするが、再び眠りに落ちると、また夢に、「彼女の夫に恐ろしい刻印を残すようなあの同じ線で分けられたあの同じ首を見る」[20]のであった。この悪夢は、アルゴウが斬首の刑を受ける破局の予知夢であることが物語の結末になってわかるのだが、この時点では、アルゴウという名が使われてもアネットに相手が元海賊とはわかっていず、デュランタルという大富豪と思っている。

この予知夢は、「ナイフの刃のように細い、微かな赤い線が」、「血のように赤く、夫の首のちょうど真ん中を一周していた」という鮮明なイメージであらわれ、また、「夢は、純粋な精霊の領界から発せられる警告で」、それらの精霊は、「漠とした未来を示すことで、天と地のあいだを飛びかってふたつの世界を仲介する精霊として、天を愛しているがゆえに目をかけるに値する人々を導くのである」と、アネットによる夢の解釈が加えられている。

「夢の解釈」はこうした神秘的で古代的な解釈から、十八世紀から十九世紀初めにかけてはG・H・フォン・シューベルトの『夢の象徴学』のようなサン・マルタンやスエーデンボルグの影響を受けた、神秘主義的であるが精神分析の先駆も思わせる夢の理論が醸成されていた。[21]　それにくらべると、ここに述べられた夢の解釈論はきわめて単純で伝統的なものであるが、バルザックはやがて、「ユルシュール・ミルエ」で、メスメリズムによる精神の感応による夢の解釈をよりどころにして、劇的な夢による透視を描いて、物語に結末をつけた。つまり、ユルシュールの夢に死亡した養い親のミノレが現れて、ユルシュールに残したはずの遺産を横領したミノレ＝ルヴロの犯行をあばいて、ユルシュールを救うという解決が導かれるのである。[22]また、『ルイ・ランベール』の「これはゆうべ夢で見た光景だ」とランベールが叫ぶ「デジャービュ現象」の有名な挿話があるから、[23]夢はバルザックの主要な関心事のひとつであったことはまぎれもない。

バルザック以前の作家で、物語に予知夢をしきりに取り入れ、その意味づけまでしようと試みたのがサドである。

サドの『恋の罪』には、不吉な夢と予感の場面がしばしば現れる。こうした予知夢のなかでとりわけ不気味なのは、「フロルヴィルとクールヴァル」で、息子殺しを犯したフロルヴィルが、夢で息子のサン＝タンジュともう一人の死骸のそばで見覚えのない婦人が涙を流しているのを見ていると、のちにその婦人が人殺しを犯す場面にいあわせた彼女がその証人になるという状況で、人殺しの婦人が「夢にあなたが出てきました[24]」というので、フロルヴィルも自分の夢で彼女を見たことを思い出すという、ぞっとするような二重の予知夢の場面がある。あるいは、「ファックスランジュ」で、ファクスランジュ嬢は、大金持ちの紳士に化けて自分に求婚している許嫁が、「獰猛な獣の姿になって、おびただしい死体が浮かぶ血の淵に自分を突き落とす夢[25]」を見るのである。やがてその男の正体は盗賊団の首領であり、彼女は結婚後、その巣窟に閉じこめられる運命に落ちる。

サドは、この夢の場面のあとに、長い注をつけて、夢のきわめて合理的な意味づけをしている。

> 夢とは秘密につつまれている働きであって、本来あるべき場に十分位置づけられていない。人々の半数は夢を軽蔑し、他の半数は夢を信じている。つまり、夢のお告げに耳を傾けるのにいささかも不都合を覚えず、これから述べるようなばあいでは、夢のお告げに従うのである。我々が、あるなんらかの事件のあとの結果を待ちうけ、その結果が事件のあとで我々にどのようにもたらされるかということが一日じゅう頭にこびりついているときには、我々はまちがいなく、それについて夢に見ることになる。さて、そのことで一杯になっている我々の精神は、そのとき、事件のさまざまな局面のうちから目覚めのあいだにはほとんど考えつかないような局面のひとつを、つねに見せてくれるものである。[26]

引用したのはサドの注釈の一部であるが、われわれが事件で頭をいっぱいにしているときは、じつは頭で考えている起こりうる局面を夢に見るのだという説明をしているから、きわめて穏当で合理的な解釈といえる。だから、「そこにいかなる迷信」、「いかなる不都合も」、「哲学に反するいかなる誤り」もなく、「叡知にほかならない」とサドは断言する。[27]

なお、盗賊の首領が紳士に化けて令嬢と結婚して盗賊団の中に連れこむ筋書の「ファックスランジュ」は『ジャン・スボガール』に影響をあたえたのではないかと『恋の罪』の序文でミッシェル・ドウロンが指摘しているが、[28]とすれば、バルザックの『アネットと罪人』も間接的に影響を受けたということになるかも知れない。

ところで、ノディエは『回想録』の中で自分がサント＝ペラジーの牢獄に一八〇三年に投獄されたときサドと出会ったといっているが、それは信憑性に欠けているし、彼がまたサドの作品を読まないことにしているといっているのも怪しいものだと、十九世紀文学に精通しているパスカル・ピアが記しているが、[29]これは逆に、ノディエがサドにいかに関心をいだいていたかを示すものだろう。サドの本が彼の死後すべて闇の世界に封印されてしまったにしても、愛書家のあいだでの回し読みや、ひそかに貸本屋（キャビネ・ド・レクチュール）には出回っていたことが推測される。そこでピアは、「バルザックはマチュリンに教えを求めたようにサドにも教えをを求めたのだ」[30]と断定している。とすると、サドの「ファックスランジュ」も、バルザックに直接影響をあたえているかも知れない。少なくとも、『恋の罪』に登場する犯罪者たちの体制批判と自己弁護の論理はヴォートランとそれほど隔たっているわけではない。

＊　＊　＊

話を戻すと、迷信深いアネットはこの夢を不吉な予兆と感じて、そこから抜けだすことができないで悩んでいるうち、結婚式の前にふたたび、同じ夢を見たのである。それにおびえ、わざと彼の頭をかかえ、首に赤い筋がないだろ

うかと調べたりさえする。むろん、白昼の時間にそんなものが見えるはずはない。[31] しかし、この夢の反復で、読者も不吉な結末をさらに予感するようになる。また、いよいよ結婚式の当日、教会に着くと教会には「一面に黒い幕が張りめぐらされ」、目の前に棺がおかれ、まわりに「葬列の青白い明かりが輝いている」[32]ではないか。結婚式と葬式がぶつかってしまったのである。不吉この上ないこの事件でアネットは倒れんばかりになる。そして、「彼の首には一本の線がある！……あれを隠して！」[33]と、また叫ぶ。そこにモンティヴェール神父がかけつけ、「そのような恐怖にとりつかれるのは、キリスト教信者とはいえません」[34]とさとすので、やっとおちついて神父の前で結婚の絆を結ぶ。しかしそのとき、罪人と「ひとつの肉体」となって、「アネットは破滅した」のであると作者はこの場面を結ぶ。[35]

こうして、やがて夢は現実となる。

さまざまな曲折を経てアルゴウはついにとらえられ、牢につながれ、いよいよ処刑されるという前夜、アネットは彼とさいごの面会をしている。そのとき、アネットは悲鳴をあげる。

アネットは怯えて切り裂くような声を上げた。なぜそんな声をだしたのか、と夫がしきりにせがんでも無駄だった。彼女はたった今見た恐ろしい幻覚を白状しようとしなかった。心ならずも彼女は見てしまったのだ。アルゴウの首にあるあの赤い線を、ナイフの刃のように細いあの線を！……[36]

アルゴウが処刑されると、アネットは一時なかば半狂乱になり、すべての気力をなくして、夫の遺体をデュランタル城のポプラの茂みに埋葬して、自分も死んでゆく。

このようにくり返される斬首のイメージは、後年の『ふくろう党』でのギャロップ・ショッピーヌの斬首などの、

衝撃的な場面を思わせるが、アンドレ・ロランやロラン・ショレはバルザックは『アネットと罪人』での首へのオブセッションを指摘し、精神分析的な解釈（去勢コンプレックス）への可能性を暗示している[37]。

＊　＊　＊

『ジャン・スボガール』では、アントニアが見るのは不吉な幻覚である。ヴェニスに着いたとたん、若い娘の棺をのせた船を先頭にしたゴンドラの葬列に出くわして、アントニアと姉はいやな気分におそわれたという挿話がその前に描かれているが[38]、『アネットと罪人』でアネットの結婚式の日が葬式とぶつかるという場面は、ここからヒントをえているようにみえる。

とにかくも、アントニアはロタリオと社交界で会うことができる。そして、アントニアは彼に惹きつけられて、ふだんは引っ込み思案で人前でピアノを弾くなどということなどなかったのに、請われるままに「うまいぐあいに突然生まれたインスピレイションに導かれて[39]」、自然にピアノの前に座る。そのときに、彼女の目の前の鏡に異様な顔が映っているのが見える。

彼女はいつもの無頓着さで鍵盤に指を走らせた。そのとき座っていた場所の正面にある鏡の反射で焦点がさだまらないでいた彼女の目は、異様で恐ろしい幻覚におそわれた。ロタリオが自分の席に近づいてきて、その席がピアノのおかれた壇の上にあったので、青白くてじっとしている彼の頭だけが、アントニアの赤いスカーフの上のほうにとびでていた。その謎めいた若者の乱れた髪の毛、悲しげで厳しく陰鬱なその目の凝視、辛そうな観想にふけっているように見えるありさま、恐らく不幸のため額に刻まれた奇妙にねじ曲がったしわがぴくぴく痙攣する動き、これらすべてが競い合って、その外観に何かぞっとするような感じをあたえていた。ぎょっとして、茫然となった

アントニアは、視線を譜面代から鏡へ、鏡から譜面台へとつぎつぎに移してゆくうちに、たちまち楽譜やまわりの聴衆までぼやけて見えなくってしまった。[40]

そこで、彼女はいつのまにか自分がとらわれた恐怖を即興的にピアノで表現していたので、聴衆が震えあがり、彼女もあわててかけつけた姉に抱きかかえられる始末となった。

ロタリオは、そのときはフランス風の優雅な服装をしていて、「優しさと力強さとたくましさと善意にあふれた目を見ると、尊敬と愛情をいだかせずにはおかない」[41]ように見えたのに、鏡に映ったのは彼の恐ろしい形相だったのである。

そのような幻影を見ながらも、アントニアはスボガールに惹かれ、やがてリドのあたりを二人して散歩して語りあうようになる。そして、どうしてもロタリオの世界に入りこめないでいる保護者の姉も二人の結婚を容認しようとする矢先、ロタリオは姿を消す。

＊　＊　＊

その別れが訪れるまえに、いくつかの重要な事件が起こる。まず、サン＝マルコ教会でアントニアがぱったりとロタリオに出会い、ロタリオが自分のように信仰をもっていることを喜ぶと、ロタリオは自分の悩みを語る。来生に焦がれながら、神を求めて教会に足を運んでも、「自分の存在につきまとう意地悪女のように虚無しかないという確信に追いかけられている」[42]と告白する。そして、来生と神を信ずるアントニアにたいして、「どんな男が、あなたに愛される資格があるのでしょう？」[43]と問いかける。アントニアは、二人のあいだに横たわる溝を垣間見て、悲しみに沈む。

つぎに、ロタリオが、護送されていたスボガールの一味を救い出すという事件が起こる。[44]これも、ロタリオとスボ

ガールのつながりを証拠立てる事件であるが、それは読者の推測にゆだねられたままに、話はすすむ。

ついであらわれる場面は、ロタリオがアントニアに語る回想である。それによると、ロタリオは「近づくことのできない岩地にへだてられたヨーロッパのオアシス」[45]のようなモンテネグロの山中にはいりこみ、文明の腐敗からへだてられ、自然のふところで平和に生きている「自然児」[46]（原文はsauvage、つまり未開人で、あきらかに、いわゆる「善き未開人（bon sauvage）」のイメージと、ルソー主義を展開しているのだが、東ヨーロッパの地に「未開人」というのはやや不自然なので、「自然児」とした）のあいだで二年間暮らし、その地に落ちつきたいと思ったほど深い共感を覚えたという。これは、その前に、スボガールがダルマティアの高貴な家の生まれであると語るダルマティアの老人の話と符合するので、ロタリオ＝スボガールの結びつきが暗示されている。

ロタリオの去ったヴェニスをあとに、アントニアは姉と共にふたたびトリエステにもどることになる。帰路では潟づたいに船旅をしていると、ついにスボガールの一味に襲われ、姉は殺され、アントニアはドゥイノ城の地下に閉じこめられしまう。そこで手厚い世話を受けるが、彼女は姉を失ったショックで狂ってゆく。そして、あるとき、枕元で看病しているスボガールに、ロタリオが夢にあらわれたと語る。悪夢を見て、亡霊や毒蛇や「人の顔をしたもっと醜悪な爬虫類[47]」や巨人があらわれ、切りおとされた頭が自分を睨んだりすると訴える。

「あなたが、この死の魔術をぜんぶ取り仕切っている魔術師のように、それらの亡霊たちのなかに立っていたの……怖くてわたしは叫んで、わたしを守ってくださいとロタリオを呼んだの。突然――わたしの妄想を笑わないで！　――ヴェールが落ちるのが見えて、あなたがいた場所にロタリオが涙を流しているのがわかったの。ロタリオは、ふるえる腕をわたしに差し出し、うめくような声でわたしのことを呼ぶの[48]」

スボガールがロタリオになる瞬間を、彼女は夢ではじめて見るのである。しかし、その夢の話にスボガールは答えない。ただ歯をがちがちふるわせて、だまりこんでいる。そのひざにすがりついて、彼女は「もうこんな話はしません」[49]といって、倒れる。

こうして、破局が訪れる。フランス軍が進軍してきて、ドゥイノ城を攻撃し、スボガールの一味はことごとく殺されたり、捕らえられた者は死刑に処せられることになった。しかし、スボガールの所在が確かめられなかったので、当局はアントニアを面通しに使おうと、彼女の目の前に一人ずつ囚人を歩かせる。

彼らの一人ごとに、彼女は恐ろしい不安がふくれあがるのを感じた。ついにぞっとするような幻覚に打たれ、回復したばかりの錯乱にまたおそわれたと思った。

彼だった。

ヴェニスで、自分の赤いショールの上にあらわれたロタリオの頭があらわれたときに、あんなにも激しい恐怖をあたえたのは、この光景だったのだ。[50]

彼は、鏡で見たと同じ表情をし、同じ色の服を着ている。「ロタリオ！」と彼女は叫ぶと、すでに引用したように、彼は「わたしはジャン・スボガールだ」とくり返す。彼女はそこで息絶える。するとスボガールは、それを見ながら、ただ「死んだか。進んでゆこう！」[51]といって、そこを去ってゆく。

こうして、ヴェニスで見た幻覚がここに成就する。しかし、この成就はロタリオであることをスボガールに否定さ

せる結果となり、分裂は分裂のままに終わることになる。

なお、この鏡の幻影はあくまでも幻覚であり、一方スボガールにロタリオが入れ替わる悪夢は意識下で気づいていたことが夢に現れたもので、この物語にはきわめつきの予知夢はないといってよい。なお、ノディエは、「犯罪的な分野における幻覚と夢」という評論では、夢の神秘性を迷信として否定しているということがある。[52]

一方、アネットが見る夫の処刑を首の赤い筋の悪夢は、デュランタルがやがて処刑されるアルゴウであることを、つまり彼のアイデンティティーを予知するものであった。そして、それはまぎれもなく実現することになり、アネットもまた、アルゴウを追って死んでゆき、アルゴウと同じ土の下に眠ることになる。

人間としてはどちらが幸福であるかはいうまでもない。そして、アネットのの「殉死」のドラマは、『ふくろう党』で、女スパイのマリーがふくろう党の首領たるモントーランの服をまとって、自分を銃撃させて死んでゆき、あいついで撃たれたモントーランといわば「相対死に」をする前ぶれである。また、『村の司祭』で、自分と駆け落ちをするために殺人と盗みをはたらいた恋人を隠しとおしたヴェロニックの予告でもあろう。あるいは、アネットとともに慈善に専心するアルゴウの姿は、やがて、死よりも重い罪の意識から救世の事業へと向かう、ヴェロニックや『田舎医者』のベナシスに発展するのはいうまでもない。

＊　＊　＊

夢想と行動と　ここで「夢想」といっているのは『ジャン・スボガール』の世界であり、「行動」とは『アネットと罪人』の世界のことである。

すでに述べたように、『ジャン・スボガール』では、本来の盗賊としてのスボガールの姿はほとんどないといってよい。さいごも、フランス軍の襲撃でたちまちスボガールの一味は一網打尽に捕らえられてしまい、そこには激しい

戦闘は見られない。一方、ヴェニスを去ったときに、アントニアがその部屋に忍びこんで発見した覚書帳には、彼の思想が記されていたという（十三章）。この覚書は、初版では二〇項、二一年版で三〇項、三二年版では六〇項と増補されているから、いかにノディエが重視していたかがわかる。[53]

その内容を二三あげてみよう。

「貧乏人が金持から盗みをするのは、物事の起源にさかのぼり、終局的な分析をすると、修復にほかならないであろう。つまり、貨幣でも一切れのパンでも、盗んだ者の手から盗まれた者の手に還る、正当で相互的な移動である」[54]

「自由とはそれほど貴重な宝ではない。それは、強い者すべての手の中と金持すべての財布の中にある」[55]

「この世に良い社会があるとすれば、それは強者に優先権をあたえて、すべてを分配する社会である。策略と裏切りがくわわると、法律が生まれる」[56]

このように、多くは盗みを正当化する、義賊としての反体制的な言説である。しかし、その行為を正当化するのは、スボガールとしてではなく、ロタリオとしてである。まるでロタリオが、義賊スボガールの行為を正当化するブレインのように語っている。それに対して、スボガールはさいごまでロタリオであることを否定するばかりか、盗賊スボガールの実践は描かれないのだから、思弁的なインテリとしてのロタリオばかりに浮上し、強調されている始末になっている。

また、ロタリオは、モンテネグロの山中の〈理想社会〉についてもアントニアに語っている。ここでは、「善き未開人」のイメージが登場して、欲得と利害のない平和な営みが描かれる。いわば、ルソー主義の体現であるが、これはすべて回想の中に閉じこめられ、しかも、その世界そのものが二つの國からへだてられた閉鎖空間であるとされている。外敵に襲われると村人といっしょになって戦ったひとこまがあるにしても、それは現実から切りはなされた夢想の空間であり、思弁の世界である。

しかし、長年無視されてきた『ジャン・スボガール』は、生誕二百年祭をむかえた一九八〇年頃から、ノディエの研究家の注目を浴びるようになったようである。そのひとつに、六八年の五月革命を戦った世代が、作中にある革命思想に注目するということもあるようだ。[57] その意味では、ノディエの思弁は現代もなお生きているというべきであろう。

＊　＊　＊

さて、バルザックの世界は、まずアネットが解職された役人の娘であるという現実的な枠組からはじまっている。そして、従兄のシャルルは法曹界で出世を狙っている野心家であり、ヴァランスにゆく馬車の車中では、仇っぽい女優のポーリーヌに色目を使われ、アネットの怒りを招くが、ポーリーヌのパトロンの某公爵のコネで検事の職を手中にして、やがてアルゴウを追究することになる。しかし、アルゴウに助けられたために、やがてアルゴウの弁護で活躍するといった、すでに『人間喜劇』を思わせる場面が連続する。とりわけ、第二十四章に展開される、アルゴウによる過去のサン＝タンドレ侯爵殺人を裁く法廷の検事と弁護にまわったシャルルとのやりとりは、犯行時間をめぐるシャルルによるアリバイの構築や、凶器の毒針と同じ毒針が法廷に持ちこまれるなど、緊迫感にあふれた場面と弁論が積み重ねられている。このときのシャルルには『人間喜劇』に登場するもっとも有能な弁護士のデルヴィルをも彷

彿とさせるものであり、何よりも法律の専門家としてのバルザックの顔が透けて見て、この作品の読みどころのひとつである。もちろん推理小説さながらのこうした筋書は、後年の『村の司祭』、『コルネリウス卿』など、サスペンスがからむさまざまな作品の筋書を作り上げるための礎石になっていることはいうまでもない。

さらに後半では、いわば手に汗をにぎるように事件が展開する。裁判でアルゴウが有罪となり、牢に入れられてからは、むしろアネットとヴェルニクトが彼を救うために物語の全面にでてきて、アルゴウの影が薄くなる。アルゴウ脱獄劇の主人公はヴェルニクトたちであり、彼らによる牢獄の攻撃と破壊は、戦術の細部をふくめ、バルザックは筆力をつくして、描写しようとする。

監獄の中で繰り広げられている血みどろの戦いの物音も聞こえてきた。銃声や叫喚は広場の叫びを上回るほどだ。戸口や窓から見えるのは、炎に包まれた梁が崩れ落ちたり、囚人のある者は裸のまま、ある者は服を防災頭巾がわりに、着の身着のまま逃げまどう光景だった。消防夫たちがポンプをもってやってきた。喧噪と混乱、叫喚と恐怖がいよいよ頂点に達するようになると、あの身の毛もよだつ襲撃が、爆撃よりももっと怖ろしい男たちによって、あの手この手と行われた。それも、社会が死を当然与えるべき、万死に値する、たったひとりの男のためだった。[58]

このような場面は、五年後の一八二九年に『人間喜劇』の第一作として発表された『ふくろう党』での冒頭からはじまる、政府軍とふくろう党とのあいだの激しい戦いの描写にほとんど直結しているだろう。さて、この騒ぎの中、アネットたちはアルゴウの独房に駆けつける。しかし、アルゴウは動こうとしない。すると、アネットが叫ぶ。

「けれど、判決を受けたって輝かしい死に方を探しもとめることはできるわ。逃げてちょうだい。それから、どこかの人民の独立のために、戦闘のさなかで死ぬの！　自由や独立や勝利の雄叫びを聞きながら、英雄として死ぬのよ！……ここから駆けていって、人民のみんなに解放の父と呼ばれるようにするの！　野次馬にかこまれた処刑台の上じゃなく、人民の衆目を集めるなかで、そういう死に方をしてちょうだい……そしたら、あなたはわたしの栄光の夫となるし、わたしもあなたのそばで戦って、いっしょに死ぬわ！……」(59)

『ジャン・スボガール』で、ロタリオが思わせぶりな反体制的な思弁を弄しているのとくらべれば、海賊を「革命の父」に祭り上げようというアネットの叫びは、その根拠がきわめて薄弱とはいえ、なんと血がたぎっていることであろうか。恐らくノディエと決定的にちがうのは、アネットが超えがたい深淵をこえてアルゴウの世界にとびこんでいったということであり、そこからつぎつぎに行動と波乱が繰りだされていることであろう。

四の馬車を走らせて、脱獄に成功しても、憲兵や警察に追われる逃亡は、破滅と紙一重である。その逃亡行も、途中で休んだ宿屋で発見される危機、馬車の荷物の中に息をこらえてひそんでいるアルゴウとアネットの悲痛な姿、ついにその馬車が見やぶられて襲われたあとのヴェルニクトの怒り、群衆が見守るなかの処刑、アルゴウの血にまみれた手を振り上げて復讐を誓うヴェルニクトの雄叫び、アルゴウの埋葬とアネットの死、そして、民衆をけっして襲わず官憲のみ襲撃して回りほとんど義賊と化したヴェルニクトがまき散らす恐怖、愛人ジャヌトンと共に壮烈な死をとげるさま……、物語は加速をしながら破局に向かい、さらにヴェルニクトの壮絶な死までを描く。まさに、大衆小説の常道をゆきながら、それを超える筆の躍動である。ただその勢いで、局面の展開があまりに目まぐるしくなってしまったのは否めないだろう。

このように、設定からも筋書からも、『アネットと罪人』は定型の波瀾万丈の海賊・盗賊小説として十分に成功している。また、影のようにアルゴウにつきしたがうヴェルニクトと愛人の対をいわばアルゴウとアネットの対のパロディーのようにときに喜劇的に描いて、随所に滑稽小説のスタイルを取り入れるという暗黒小説によくある常道のひとつもふまえていて、甘ったるいラブシーンや荒削りな文章をふくめ、大衆小説の外観のすべてをそなえている。

これを分身のテーマの展開、反体制的思弁の披瀝、ロマン派風の影のあるロタリオの孤独な人間像の造形などに集中し、それを修辞的な美文体で描いているノディエの作品とくらべると、似ているのは筋書だけというほかないであろう。むしろ百パーセントちがうというべきではないか。しかもバルザックは、聖女と海賊の恋という大胆な設定をして、いわば力業でその悲劇的な恋の結末を、心のドラマと波瀾万丈の事件を組み合わせて描いている。そこには、後年の『人間喜劇』に発展する原石が至るところで輝いているといっても、過言ではないだろう。

［注］

（1）Pierre Barbéris : *Aux sources de Balzac, les romans de jeunesse,* bibliophile de l'originale, 1965, p.249.

（2）Charles Nodier : *Œuvres de Charles Nodier 1,* Slatkine Reprints, 1980, p.5-34.

（3）私市保彦「暗黒の美学とフランス、あるいはフランスにおけるゴシック小説の影響と発展」（『城と眩暈』二三五―二六四頁、国書刊行会、一九八二年）

私市保彦「バルザックと暗黒小説」（「ユリイカ―バルザックの世界」二一六―二二五頁、青土社、平成六年十二月号、）

（4）絶賛と酷評がなかばする反応はつぎの文献に紹介されている。Pierre. Barbéris : *Op.cit.,* p.273-280.

（5）Honoré de Balzac : *Vicaire des Ardennes,* Pollet, *1822,* Édition fac-similé des Bibliophiles de l'originale, 1962.

（6）Honoré de Balzac : *Annette et le Criminel,* Buissot, 1824, Édition fac-similé des Bibliophiles de l'originale, 1963, p.4-18.

（7）Honoré de Balzac : *Vicaire des Ardennes, OP.cit,* P.255, *Note de l'éditeur.*

（8）*Argow le Pirate, (Œuvres complètes d'Horace de Saint=Aubin),* Souverain, 1836.

(9) Honoré de Balzac : *Annette et le criminel, op.cit., tome 2,* p.133-34（なお、引用訳文は水声社刊行予定の澤田肇、片桐祐共訳・私市保彦監訳による。）
(10) *Ibid.*chapitre XII.
(11) Honoré de Balzac : *Traité de Prière, Œuvres diverses 1,* Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1990, p.601–610.
(12) Honoré de Balzac : *Annette et le Criminel, op.cit.,* p.165–173 .
(13) Pierre Barbéris : *Op.cit.,* p.264.
(14) Charles Nodier : *Op.cit.,* p.81.
(15) Charles Nodier : *Ibid.,* p.105–108.
(16) Charles Nodier : *Ibid.,* p.314–315.
(17) Charles Nodier : *Ibid.,* p.256.
(18) Honoré de Balzac : *Op.cit., tome 1,* p.52.
(19) Honoré de Balzac : *Ibid., tome 2,* p.25–29.
(20) Honoré de Balzac : *Ibid.,* p.29.
(21) Gotthilf Heinrich Schubert : Die Symbolik des Traumes,（邦訳　シューベルト原著、深田甫訳『夢の象徴学』、青銅社、一九七六年）
Albert Béguin : l'Âme romantique et le rêve（邦訳、アルベール・ベガン原著、小浜俊郎・後藤信幸訳『ロマン的魂と夢』、第七章、国文社、一九七二年）
(22) Honoré de Balzac : *Ursule Mirouet, La Comédie Humaine III,* Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1976, p.959–988
(23) Honoré de Balzac : *Louis Lambert, La Comédie Humaine XI,* Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1978, p.620–621.
(24) Sade : *Les Crimes de l'Amour,* Zulma, 1995, P.248.
(25) Sade : *Ibid.,* P.248.
(26) Sade : *Ibid.,* P.248.
(27) Sade : *Ibid.,* P.248.
(28) Sade : *Les Crimes de l'Amour, Préface* de Michel Delon, Gallimard, 1987, P.22.
(29) Pascal Pia : *Sade au XIX siècle, Magazine littéraire-Sade, écrivain,* janvier, 1991, p.43–44.
(30) Pascal Pia : *Ibid.* p.44

(31) Honoré de Balzac : *Annette et le Criminel, Op.cit, tome 2,* p.215–217.
(32) Honoré de Balzac : *Ibid.* p.227.
(33) Honoré de Balzac : *Ibid.* p.231.
(34) Honoré de Balzac *Ibid.* p.233.
(35) Honoré de Balzac : *Ibid.* p.235–236.
(36) Honoré de Balzac : *Ibid., tome 4,* p.178.
(37) André Roland : *Introduction, Annette et le Criminel,* GF Flammarion, 1982, p.27–28
Roland Chollet : *Préface, Argow le Pirate (Annette et le Criminel), Roman de Jeunesse XXXV,* Edition Rencontre Lausanne, p.22
(38) Charles Nodier : *Op.cit.,* p.114.
(39) Charles Nodier : *Ibid.,* p.137.
(40) Charles Nodier : *Ibid.,* p.138.
(41) Charles Nodier : *Ibid.,* p.136.
(42) Charles Nodier : *Ibid.,* p.164.
(43) Charles Nodier : *Ibid.,* p.166.
(44) Charles Nodier : *Ibid.,* p.190–191.
(45) Charles Nodier : *Ibid.,* p.221.
(46) Charles Nodier : *Ibid.,* p.221.
(47) Charles Nodier : *Ibid.,* p.296.
(48) Charles Nodier : *Ibid.,* p.296.
(49) Charles Nodier : *Ibid.,* p.297.
(50) Charles Nodier : *Ibid.,* p.314.
(51) Charles Nodier : *Ibid.,* p.315.
(52) Charles Nodier : *Des hallucinations et songes en matière criminel,* en *De quelques phénomènes du sommeil,* Le Castor Astrol, 1996, p.77–86.
(53) 西尾和子『シャルル・ノディエの文学―想像力の勝利―』、九頁（駿河台出版社、二〇〇一年）
(54) Charles Nodier : *Ibid.,* p.247.

（55）Charles Nodier : *Ibid.*, p.256.

（56）Charles Nodier : *Ibid.*, p.257.

（57）”Cette parenté, bien réelle et souvent évoquée (en particulier par Gaétan Picon, dans «Michelet et la parole historienne»), entre la révolution de 48 et les évènements de mai 68, redonne donc à «Jean Sbogar» une nouvelle actualité...” (*L.C. : Préface, Nodier, Jean Sbogar*
La Bibliothèque oubliée, Édition France-Empire, 1980, p.12)
つぎの論文も、『ジャン・スボガール』の革命思想に焦点を当てている。
Jean Claude Rioux : *Les tablettes de «Jean Sbogar», Charles Nodier-Colloque du deuxième centenaire Besançon-Mai* 1980, Les Belles Lettres, 1981

（58）Honoré de Balzac : *Annette et le Criminel, op.cit., tome 4*, p.99–100.

（59）*Ibid.*, p.107